

平成 27 年度「世界エイズデー」キャンペーンテーマ・フォーラム報告 「一緒にテーマを考えよう」

2015 年 5 月 22 日（金）18:30～20:00 大阪検査相談・啓発・支援センター「chotCAST なんば」
出席者 15 名

■開会あいさつ、趣旨・策定プロセスの説明（公益財団法人エイズ予防財団 宮田一雄理事）

- ・世界エイズデーの国内啓発キャンペーンのテーマについては平成 22 年度以降、現場に近いところから意見を積み上げ、テーマ候補案を決めるプロセスを試みてきた。今回もフォーラムおよび API-Net に寄せられた意見を集約し、6 月の検討会議を経て 1 ないし 2 案をエイズ予防財団から厚生労働省に提案する予定である。エイズの流行の現状を把握し、社会がどう対応したらよいか。プロセスを積み上げ、メッセージを打ち出していきたい。現状や対策の課題、その解決策といったことも含め、思う存分議論していきたいと思う。
- ・参考までに HIV/エイズ分野でこの 1 年に起きた出来事をまとめた（資料 1）。

■地方自治体のキャンペーンテーマ使用状況について説明（同財団 堀内由紀）

- ・昨年度テーマ「AIDS IS NOT OVER ～まだ終わっていない～」の使用状況について 141 自治体に調査した（資料 2）。昨年 8 月のテーマ決定以降（～本年 1 月まで）、全体の約 67%にあたる 94 自治体がテーマを使用していた。使用方法は、啓発資材への盛り込み、HP 上のリンク、講演会・勉強会等での説明、パネル展示等である。使いやすかったか否かとその理由についても自由回答してもらった。

ディスカッション

■司会・進行（エイズ予防財団 辻宏幸）

様々な立場でエイズの問題に関わっている方がお集まりだと思うが、現場で実際に感じていること、直面している問題などをざっくばらんにお話いただきたい。

■参加者からは以下のような意見が出された。

【現場で感じる問題】

《時代の変遷と現場の課題》

- ・海外のエイズ対策では、WHO が新しいキーポピュレーションとしてトランスジェンダー等を入れているが、日本ではトランスジェンダーを無視している状態に近い。見ていない層、気づいていない層があることは、啓発の上で困っていることのひとつだ。国連合同エイズ計画（UNAIDS）はゼロ discrimination（差別）を掲げている。日本では予防と差別・偏見の解消が直結していない気がする。誰もがエイズということばを知っているが、差別・偏見をなくすことがなぜ予防対策へつながるか気づいていない。この問題が解消されれば、病院に相談しやすくなるし、検査も受けやすくなる。この点に多くの人が気づくようなメッセージを出していくべきではないか。差別・偏見の問題を解決するようなメッセージが出せたらよい。

→トランスジェンダーだけでなく、在日外国人等の問題にも気づいていない。

→ドラッグユーザーについては予防指針に個別施策層として位置づけられている。

- ・年間 40～50 校程度、啓発プログラムのために訪れている。数年前までは小学生でもエイズという病名を知っている子がいた。しかし昨年、小学生に聞いてみると全く知らなかった。小学校の性教育

は徹底されていないようだ。中学校では性感染症としてチラッと出てきても予防までいかない。高校で熱心な先生がいれば予防教育は可能なのかもしれない。英語のテーマは使いにくいという声もあるようだが、「AIDS IS NOT OVER」「“AIDS” GOES ON...」は英語教育も兼ね、小学生対象でも使用しやすかった。分かりやすい言葉なら使用できると思う。

→学習指導要領上では、小学校高学年からエイズという病名を教えることになっていたと思う。

→文科省が LGBT の理解に絞って一言発すれば広がるだろう。

→LGBT は人権で、性教育は保健体育の管轄。セクションが分かれてしまい全体での理解が難しい。

- ・電話相談を日々実施している。気になる症状が出たのでネット検索し、それがきっかけで電話してくる人もいる。ネットでは様々な情報が飛び交っている。Q&A のサイトに、風邪に似た症状が出たらエイズを疑えと書いてあった、私はエイズだろうか、と電話をかけてくる。昨年はテレビ朝日や NHK、BS 朝日等に専門家が出演し、エイズを取り上げていた。2008 年頃なら放送後に検査件数や電話相談件数が増大したに違いない。最近はその局地的・短期的な増加にとどまり、熱しやすく冷めやすい状況だと思う。

→ネットで調べればそれなりの情報に行きつくが、まだ足りていないということだろうか。

→ネット上の誤った情報を見て、心配の必要がないのに電話相談してくるケースが多い。

→正しい情報を見極めるのが難しい。

- ・検査で陽性となった人が不安なく病院を受診し、戦々恐々として来院されたとしても医療者側がしっかり対応すること、陽性者が抱えている問題を遠慮なく話せるよう配慮すること、陽性判明後もこれまでの生活を諦めずにすむよう支援体制を整えること等を課題として、医療の現場に携わってきた。医療は著しく改善し、HIV 感染症は慢性疾患になったと言える。HIV 感染症を特別視せず誰もが診られる普通の病気として扱えるよう、医療者側の裾野を広げる努力もしているが、実際には専門性や訓練が必要である。若い医療者は差別・偏見の気持ちをもっていない。言い換えれば、差別・偏見にも気づいていないとも言える。患者さんがどういう気持ちで生活しているのか、個々に対応する必要があるだろう。その意味で Future Japan は非常に参考になると思う。

薬害エイズの流れの中でエイズをみていこうという時代、性感染の中でみていこうという時代、いろいろと変遷がある。医師のおかれている状況も変わってきている。今は専門医という大きなうねりがある。HIV/エイズを診ているからといって特別扱いしてもらえなくなり、感染症をやっていると云わなければならない。

医療者は代替わりしはじめている。これまで第一線で頑張ってきた医師たちが年齢的に引退を迫られている。今後を考えなければならない。

知恵袋のような情報はふんだんにある。情報を得た後にどう考えるかという教育が乏しいのかもしれない。情報に踊らされてしまう。自分で考え、どう役立てていくのか。世の中は常に動いている。これと決めつけず、良い方向に動くようサポートしていかなければならないと思う。

→HIV/エイズを特別扱いしないことも必要だと思うが、残された課題をどう解決するのか考えなければならない。

《昨年度のテーマ「AIDS IS NOT OVER ～まだ終わっていない～」について》

- ・テーマを見た瞬間にその通りだと思った。エイズ対策に関わり、NGO や当事者から話を聞き、身近に感じているからだと思う。だが、一般の人は薬害エイズの歴史すら知らない状況だ。背景がわからないまま「まだ終わっていない」と聞くと、何のことだろうと思うのではないか。どの層に向けてアピールするかで大きく異なる。

→アンテナをもっていない人にストンと落ちるメッセージではなかった可能性もある。テーマをどの対象に向けるのかは非常に悩ましく、毎年フォーラムであがるキーワードだ。

- ・いろいろな使い方ができるテーマだった。メインテーマに+αする形で、自分たちが伝えたいものを加えていけるテーマだった。

- ・エイズ対策にどっぷりとつかっている人からすれば、このテーマは当たり前過ぎるくらいなのだが一緒に活動している人にとっての常識が広く社会的な常識になっているわけではない。機会あるごとに話をしていけないといけない。
- ・若い人は議論に参加していたのだろうか、エイズの問題が終息に向かっていると思いついでいる人に何か気づかせたいテーマなのではないか、と個人的に思った。若い人はエイズのことを知らないから関心がないのであって、終わったと思っているから関心がないわけではない。皆にもっと当てはまる大きなテーマを出し、そこからサブタイトルを個々に加工していくのは如何だろうか。
 - テーマの方向性につながる話だ。エイズのことを全く知らない人、以前知識を得たがその後更新されていない人、と二通りいる。どこにフォーカスをするか、検討しなければならない。

《テーマの方向性について》

- ・Facebook、LINE、Twitter など SNS の時代。例えば「ゼロ」(ZERO) とテーマを掲げ、私は「Zero new HIV」だとか、私は「Zero discrimination」等と、いろいろなメッセージを自分にあてはめたり、考えたりすることができるテーマにしてはどうか。1年間通して自分なりに考えられるものによれば、ダイナミックな動きにつながっていくのではないかと。
 - 場合によっては、複数選択肢があってもよい。
 - 例えば「ゼロ」というテーマにロゴもつけられれば、あとは使用する側が考え、それぞれつながることができる。個々は少しずつ異なったことを話すが、すべてエイズの問題につながる。
 - シンプルだからこそ付け足しができる。
 - 魅力的なアイデアだが、ゼロというと、感染ゼロとか、患者ゼロとか、エイズ終結のようなメッセージに引きずられないか。
 - エイズの問題をゼロにするとか、感染者がゼロになるというメッセージではない。そのことを予め説明しておけたらよい。
- ・メインテーマを決めて、それぞれの対象者や活動母体もつ特性をアピールしたほうがよいと思う。テレビ・新聞の報道や呼びかけの後に受検者数が増える。潜在的に不安を持つ人が多い時代だ。フィールドがそれぞれ異なるので、+αの新鮮味あるいはハッとさせるサブテーマもよいと思う。
- ・幅広く全体に浸透させるようなテーマを設定するよりも、毎年ターゲットを設定し、複数年かけて広げていくほうがよいように思う。全体的にバシッと決めるよりは、課題にあがっている層に向け、それぞれ地道に働きかけたほうが効果的な気がする。
 - UNAIDS がそうしていた時期がある。今年は女性、翌年は若者、次は男性というように。
 - 対象を定めれば狙ったところには届きやすいが、対象から外れた先には、その年は何も届かなくてよいのか。
 - 過去に、5年分を考えてみるという議論もあったが、実現するのはかなり大変なことだ。
 - 状況も刻々と変わる。先を見越したテーマ設定も難しいかもしれない。
- ・電話相談を受けると、その人の問題は HIV だけではないことが多い。幅広いターゲット層に設定しておき、自分のこととして考えてもらえるようなテーマが必要な気がする。
 - 現場の様々な声を聞いていると、多様な層の存在を感じる。
- ・ノートに書いてあったつぶやきに、こんな危機感のあることばがあった。「生でやっていい？なんて聞くな。どうせ従うしかないのだから」と。以前、Talk about AIDS とか Talk about sex というメッセージがあったが、当時よりもっと話し合われていないのが現実だと思う。最初は No と言おう、そうすれば性の会話につながる、と助言したこともある。
 - セックスのことを抜きにして、エイズのことを話し合うことはできない。そこが最初のハードル。この課題は以前からずっと続いているが、現在はむしろ後退しているのか。性を肯定的に捉え議論できるようなメッセージが必要なかもしれない。
- ・子どもや学生に向けメッセージを伝えたくても、大人が曲解して壁になることがある。そのような大人たちの目を開くメッセージも必要なのではないか。

- ・中学校や高校への啓発活動、検査や電話相談に関わっている。ある高校生が「日頃から検査は気になっていたが、(昨年度のテーマが入った)このポスターを見て受検の決意をした」と話してくれた。関心のある人はどんなメッセージにせよ見てくれる。また怖がる人も多く、「まだ終わっていない」というテーマですら恐怖を感じるようだ。一方でもっと関心を寄せてほしい人には弱すぎる。先程のアイデアのように、ひとつのワードを出し、個々で意味を放っていくのは非常によいと思う。会話が広がるだろう。テーマを決めるときに、ちょっとしたことで恐怖を感じる人がいる点も考慮していただけたらよい。

→関心がないのは若者だけではなく、どの年代にも一定層いるように思う。

《まとめ》

明確に対象を絞ったテーマ、個別にアレンジして展開できるテーマ、幅広く伝えるテーマ、などメッセージの出し方、対象の絞り方について大変貴重なご意見をいただいた。これらの意見を踏まえ、検討会議で話し合っていきたい。エイズ予防情報ネットではテーマ案やテーマに関する意見を募っている。締め切りは6月10日(水)で、宛先は theme@jfap.or.jp である。

■閉会あいさつ (公益財団法人エイズ予防財団 白阪琢磨理事)

冒頭でも触れたように、このプロセスが非常に大事だ。ここでの意見を持ち帰って議論し、検討して次のテーマを決めている。大変貴重なご意見をいただいたように思っている。

地方で取材を受けると、セックスという言葉は使用できないので性行為という言葉に変えてくださいとお願いされることがある。ディスカッションしながら改めて痛感したのは、一人一人の要素が違い、理解も違い、置かれている状況も違うこと。様々な違いがある中で、それを踏まえたテーマを作る難しさがある。過去のテーマはお手元の資料 (http://api-net.jfap.or.jp/lot/2015camp_theme.html) で確認できる。テーマの良し悪しは個々に違いうだろうが、近年はこうして議論を重ね、プロセスを重視できるようになった。発言がないと広がらない。そして、どういうテーマに決まったとしてもそれだけでは完全ではない。それを軸に個々でどう生かしていくのか。エイズの関心は減っているかもしれないが、性感染症は広がっている。何とか留めておけるのは皆さんのご尽力のお蔭だと思う。本日はありがとうございました。